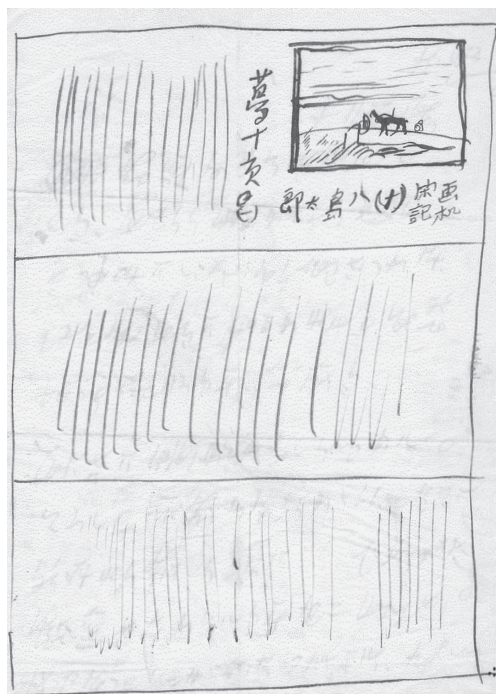


絵本作家・八島太郎を生んだ『ニューカナディアン』新聞

——交換書簡群とバーチャル公共空間——

田 村 紀 雄



八島が『ニューカナディアン』にエッセイ掲載で指示した割り付け

I 八島太郎の反ファシズム運動

八島太郎（本名・岩松淳）は、その85年の生涯を主として「絵本」というメディアを駆使してかれの思想をファシズム、戦争、社会的不正義、非人間主義に対置しつづけた。1908年鹿児島県に誕生、31歳までの日本での10回に

およぶとされる検挙や拘禁の人生にくらべ、その後の米国での「亡命」生活と「自由」な絵本制作活動は85歳でガーデナ市に死去するまでの残り50年間とは場所や環境こそ違い一本の太い頑強な鋼線で貫かれている。

児童の時代から「絵」の才能を発揮してきた岩松は上野の美術学校を卒業したあと、個展を開くなど、作品を発表してきたが、小林多喜二のデスマスクを写生制作、政治への批判として当局に抑留される。これらの出来事が創作芸術家としてひどく息のつまる環境に思えた。岩松は、1939年、妻・新井光子（本名・笹子智江）とふたり、ひっそりと神戸をはなれ、渡米した。そのとき、断腸の思いで、生まれたばかりの長男・信（マコ）を神戸の親の許に残して船にのる。この間の二人について、親交のあった宇佐美承が『さよなら日本——絵本作家・八島太郎と光子の亡命——』（1981年）で記録しているほか、多数の評伝、研究がある。岩松は22歳で思想の相通じる光子と結婚したが、米国への「亡命」後も、その生活や活動を共にした。

ニューヨークで生活を始めて2年目に日米が開戦、米国はアメリカに在住する日本人や日系人（米国で生まれ米国の市民権をもつ）の大半を強制収容したが、一部の人間を戦力として軍に召集または雇用した。知識人の一群は MIS

(陸軍情報部)等により対日戦争の情報活動に投入された。

その直前の1943年、「八島太郎」の筆名で自伝的な絵物語『*The New Sun*』（『新しき太陽』）をヘンリー・ホルト出版社から出版する。この時以来、岩松は八島太郎を名乗ることになる。

八島は米軍にOSS（戦略局）に職をえてから、その要請に応じて、日本兵への投降勧告ビラ「死ぬな」「父よ、生きよ」「必ず生きて機会を待て」などの制作に関与し、その画家としての才能を対日戦争の早期終結に生かしたことはよく知られている。実際、そのビラ戦術の最前線であるカルカット等にも進駐している。

対日戦でのビラについては、多数の文献があるが、その大要は、山本明の論文「資料・戦時宣伝ビラ研究の文献解題」（1978年）がてがけた。2011年になって土屋礼子が『対日宣伝ビラが語る太平洋戦争』（弘文社）によって、相当正確に俯瞰できるようになった。

八島が制作したビラのなかには、冊子型の「運賃無蔵」（うんがないぞう）と題した、絵物語はつとに有名である。なによりも、墨と筆でえがいた文章や絵は、前線の塹壕で絶望的な抵抗をつづける日本兵に衝撃的な影響をあたえたようだ。かれの墨絵と墨の文字による作品のスタイルが確立し、日本人・日系人に八島の画風として定着する。

戦後、除隊してニューヨークに戻った八島は、自伝的絵物語 *Horizon is Calling*（『水平線はまねく』1947年ヘンリー・ホルト出版社）を発行、日本人コミュニティに次第に知られることになる。これは、276ページの大冊で、1ページの約6割を墨絵、キャプションとして、2、3行の英文文章、同様の日本訳という構成である。

物語はかれの少年時から、郷里の生活や風習、ファシズム下の日本等からなる。戦後、この作品で一躍、全米に知られるようになり、同じ英語圏のカナダの日系コミュニティでも、この本の評判がひろがる。八島と当時、カナダで発行されていた唯一の日本語新聞『ニューカナディアン』の梅月高市と八島との緊密な絆が生まれたのはこの頃と考えられる。

ふたりは、頻繁に連絡しあい、『ニューカナディアン』紙上に数多くの八島のエッセイが掲載されるようになる。また『ニューカナディアン』紙上で八島の諸作品を宣伝、頒布の協力をする。

梅月のところに実に30有余年間、約八十通の書簡、それにエッセイの原稿、添付された挿絵の原稿のパッケージが残されることになった。ここでは、主題のように二人が作り上げた絵本群の制作のための「バーチャル公共空間」を検討するたに内容分析をすすめる。なお、日付は梅月が落手した日を記入したものである。『ニューカナディアン』を発行し続けるために、カナダの治安当局は1941年の日米開戦直後から、新聞社に嚴重な事前・事後の検閲を課した。梅月らの編集スタッフは、新聞を維持してゆくため、注意深く、原稿、ゲラ類を管理したため、ほとんどの書簡、投稿原稿、通信には日付がスタンプされて残存している。

1945年の敗戦直後のニューヨーク時代から、1955年のロサンゼルス時代のおよそ31年間の『ニューカナディアン』（ウィニベグからトロントへ発行所を移動）の梅月高市らと、八島一家との八十通もの新しく発掘された書簡類は、これまで全くしられていない八島の生活を描いている。その内容は書簡類としたがアイデアの交

流、内容の批評や批判、作品の指示、ビジネスの展開など雑多なもので、北米での思想公表のための二人の協働制作の空間をつくるものである。

米軍のOSSその他から復員、自由になったのはよいが、同時に生活の糧をうしなった。これは、戦争に動員されたすべての米国軍人や民間人に共通している失業だが、米国に移住して日もあさく、生活の基盤もない八島一家にはことのほか応えた。八島は生活のため、作品を切り売りしたり、額縁などの画材つくって売ったり、ときには清掃などの不慣れな肉体労働に携わっていたようだが、絵画等の芸術の道ももちろんすてがたく、こんな時、『ニューカナディアン』の梅月らが、支援の手をさしのべた。

梅月らは、当初、出版されたばかりの八島の自伝的な絵物語 *Horizon is Calling* をカナダの日系コミュニティに頒布することからスタートし、やがて『ニューカナディアン』の紙面にエッセイやカットを掲載すること、八島を積極的に紹介する記事を書くことなどにおよんだ。梅月は相応以上の稿料を送るなど物的・経済的支援をつづけ、励まし、やがて両家の友情を育む。10歳以上年長の梅月への感謝、敬意、「兄」としての頼りがいは、カナダと米国の物理的な距離を越え「絵本等の創作・創造のための知的なバーチャル公共空間」を形成することへとすすんでいった。残された書簡類は、八島の生活事情を反映して、ノートの切れ端や、あり合わせの紙片ばかりである。梅月からの書簡等も特別のものばかりでは無かったようである。

八島は基本的には画家であろうが、その延長線上でかなりの仕事をしている。装丁、舞台美術もやる、文章も書く、手紙・書簡も多いし、

美しい。八島と親交があり、その伝記（2008年、創風社）を書いた『北米毎日新聞』（サンフランシスコ）社長であった野本一平は「手紙を太郎からもらった人は沢山いる。絵の仲間だけでなく、太郎の周辺にいた人は、あの独特の筆跡の、そして筆圧のつよい手紙を」と評している。

80通におよぶ書簡の膨大な文章を分析すると、ここでは省いた私的コンテンツは、すでに発表されている著述、評伝等で周知のものばかりであるが、創作・制作などの社会的活動にかかわる「公共空間」を構成する二人の文章はほとんど知られていない。二人が醸成した思想的営為をあますところなくしめしている。

II 八島のニューヨーク時代。 交流の始まり。

八島太郎（まだ岩松淳の本名）が日米開戦直前に日本を脱出、ニューヨークに居住、米軍に従軍、戦争が終わり復員して再び紐育（NY）の住人になった戦後からの梅月高市（『ニューカナディアン』新聞の編集長）との交流の始まり。梅月は戦前カナダのブリティッシュ・コロンビア州ヴァンクーヴァー市（晩市）で日本語の『日刊民衆』編集長であったが、開戦で発行禁止となり、代わって日系カナダ人二世の新聞で英文中心の『ニューカナディアン』の編集、のちに発行を引き受けた。英語の不十分な日本人にカナダ政府の命令や通知を伝達するのに不十分なため、日英両文での発行を要請されて、日本語ページを担当した。カナダ政府の命令で晩市在住の全日本人・日系人（カナダ生まれでカナダの市民権をもつ二世など）の西海岸退去

の動きに従い、新聞社と従業員、家族をひきつれてカナダ大陸を東へ向かって横断することになった。『ニューカナディアン』は当初、カズロー市に転出、ついでウィニペグ市に移動していた。後に、さらにトロント市へ移動する。

1947年5月31日

この「パッケージ」で残存している八島から梅月あての最も古いもの。内容は梅月が八島の著書 *Horizon is Calling* (『水平線はまねく』として後に日本で出版)を知って、注文したことに対しての返事。カナダからの支援に喜んでいる様子がよみとれる。妻の岩松光子から代金決済のことで添え状がある。当初は頒布にも責任が重かった。

このころ、八島は「米軍戦時情報部」から復員し、ニューヨークに在住して画家としての生活を再建している最中で、この年、自伝絵物語の上記著書が、ニューヨークのヘンリー・ホルト出版社から上梓されたばかりであった。

一方、梅月高市は新聞『ニューカナディアン』の編集長としてカナダ、マニトバ州のウィニペグ市に戦時中、西海岸からたどりつき、ユダヤ系カナダ人のイディッシュ語印刷工場をかりて新聞発行を続けていた。八島の著書は米国のジャーナリズムで紹介され注目を集め始めていたので、梅月は自身の日英両語の新聞『ニューカナディアン』を送り、本の発注をしたものとみられる。

1947年6月5日

岩松光子から梅月への二つの八島の著書の送り状と書簡。送り状によると、梅月は *Horizon is Calling* を30部、*The New Sun* を10部注文した。代金の明細が付いている。また、支払い

方法などで、税関の米加間での面倒な手順や軍関連の問題があったようで、その解決策が相談されている。戦後2年しかたっていないこと、米加といえども主権国家としての相違のほか、日系人、それも過去の社会運動に関係していた、ということが当局に警戒感をあたえていたかもしれない。

1947年10月29日

『ニューカナディアン』への寄稿依頼要請への応諾の返事。これによると、梅月は八島にエッセイの寄稿をもとめる依頼文をおくっている。1947年11月17日

八島の「ニューヨークの性格」と題する原稿とその送り状。新年号用を意識してか、エッセイはニューヨークの風景や生い立ちなど、始めて『ニューカナディアン』の読者への登場で、一般的な話題。送り状には筆者の紹介に必要な経歴などの情報。これがバーチャルな空間の形成の始まり。

1947年12月31日

『ニューカナディアン』新年号掲載の八島のエッセイを梅月が送付したことへの礼状と、紙面へのコメント。梅月は八島の事情を察して『ニューカナディアン』の体力を上回る稿料をすぐ送った。

1948年5月5日

八島から八島の仕事についてのチラシの配布依頼。また文面から、八島と内田一作との書簡による交流がうかがえる。内田は『ニューカナディアン』の古くからの協力者で、次第に彼らが、この「空間」に加わってくる。

1948年11月22日

八島のNYの「日本画塾」の状況報告と今度は『ニューカナディアン』への執筆申し入れ。

当時、ニューヨークにあって、生活は厳しい状況が読み取れる。この年、長女のコモ（桃）誕生し、翌年には長男のマコも日本から合流し、家族4人の生活になった。八島家にとって、もっとも経済的に厳しい時期であった。

1950年10月28日

八島は個展を10月14日から31日まで、ニューヨークのモドリアル・ギャラリーで開いたが、その案内のチラシの裏に書いた手紙。チラシは、個展に出品の26点のリストと、米国に到着した長男マコを題材にした水彩画、それに国吉康雄の推薦文。『ニューカナディアン』の梅月高市から八島に新しい原稿依頼に対して、構想をつたえたもの。

1950年11月2日

八島の私的な交友のひろがりに梅月が労をとったことへの礼状。八島はひどい胃潰瘍など、健康上の問題も伝えている。

1950年12月18日

『ニューカナディアン』への新年号への原稿・随筆「みやげもの」と、添え状。引き続き、胃潰瘍のための遅延したことなどを詫言っている。かなりの困窮をよみとれる。経済的困窮と病気のためか、絵画・文章の制作・執筆発表はあまり多くない時期である。

1950年12月27日

稿料のお礼、胃潰瘍のこと、『シカゴ新報』の藤井寮一からの原稿依頼も果たせなかったこと、などの近況。年末年始の挨拶の欠礼を陳謝。病状が相当に悪いことを告げている。

1951年3月12日

梅月がカナダ旅行を誘ったようで、身動きができない苦衷をつたえている。文中に金銭上の問題、八島が設立した「版画研究所」を若い世

代に、託すべく、そのための設備投資にまた費用がかかるため、八島の個展をひらいて費用を捻出することを伝えている。

1951年5月10日

八島はこの前後、ほとんど仕事がなく、絵画以外の肉体労働にも従事して収入をえていた様子である。自身も随所に「不惑の年」の行き詰まりにふれている。作品発表の場は、出版は限られており、個展も生活のたしにはならず、わずかに北米東部で発行されていた『ニューカナディアン』（トロントにウィニペグから移動していた）、『ニューヨーク日米』、『シカゴ新報』など、戦争末期から、戦後初頭、ファシズムに反対する在留日本人・日系人のあいだで繰り返し広げられた「民主委員会」の「仲間」の支援による寄稿等のわずかの仕事であった。八島は『ニューヨーク日米』の常連寄稿者のひとりであった。

『ニューカナディアン』の梅月高市は八島のために、長期に紙面を提供する決意をする。エッセイ「八島太郎『画房小閑記』」だ。そのやりとりの書簡で、八島の強い創作意欲と厳しい財政事情がくみとれる。

八島のエッセイと挿絵を付した書簡だが、挿絵は2度目の使用とつぎのようにことわっている。「同封の2枚のなかから好きな方をえらんでください。本からとったものですが、シカゴ新報のもので。これだけの力のこもったものは、急に描けないものですから」。おもしろいのは、紙面の割り付け案まで同封している。

同封されているエッセイの原稿も加筆・削除が多く、なんども推敲したあとがくっきりしており、生活に追われながらも売文的なエッセイストでないことがわかる。

1951年6月31日

この14番目の書簡、梅月は7月31日とするスタンプをおしているが、八島の末尾の日付は6月29日、あきらかに梅月の誤り。文面によると、八島はシカゴにしばらく滞在して、ニューヨークに戻り、野外で1月半の「晴耕製作」に従事するとある。新しい仕事のようなのである。また文面にはシカゴ滞在中に稿料が届いたが、感謝の意と、一足さきに帰宅した妻の光が「電燈代に消費」とある。

1951年11月15日

『ニューカナディアン』の1952年新年号の原稿依頼にたいする返信である。それによると、八島の胃潰瘍の病状があくまで、わるく、『シカゴ新報』からの依頼原稿も滞り、『ニューカナディアン』のものも締め切りまでに厳しいとある。文章だけでなく、若きゲーテの画家としての煩悶を引き合いにだして、自身の「画家としての成長」にも苦痛を吐露している。

1951年11月28日

依頼されていた新年号原稿の送付につけた添え状。タイトルに「スポット」か、「氷雪裏庭」のいずれかが、よいのではという提案。原画の返還を希望している。個展を念頭に原画の返還を求めることが多い。「稿料は楽しみにしています」の遠慮がちの追伸。

1951年4月5日

近況。ニューヘブーン市に出かけたこと、帰宅したら為替がまっぴいで感謝の気持ち。(版画)研究所のほうは、八島の寄贈展以来、どうにか動いており、八島も20枚ほどの木炭画をつくり、気分が強まっていること。さらに、1年ほどしたら、「現代民芸工場」を作り、この不景気を耐え抜く方法を実現したい。

研究所がうまくまわって、創作意欲がたかまっている様子である。

1951年4月16日

八島から『ニューカナディアン』への寄稿提案。毎週、コラムを寄稿し、少額の対価を希望している。コラムの内容は「エッセイ的範囲、それも画家としての範囲以外のものは書かない。半永久的にしてもよい」。この企画をおもいつたのは、版画で日本人としての思いがたよくなっていることのようなのである。「書くならば、読んでもらえ、忘れられないように書きたい」という気持ちだという。ただしこの企画案、実現していない。編集者と作家との間でよくあることだ。

1952年6月12日

ヴァイキング社から少年向きの色刷絵本『日本の樹』を出版することになったこと。「せめて印税の虹を夢みながら、いい本をつくっておこう」とはりきっていること。この絵本、翌1953年、ヴァイキング社から出版された『村の樹』(*The Village Tree*)のこと、のち、1998年創風社から『村の樹』として日本語版が出版されている。その他、梅月の縁で知己になった友人の消息についての短信。

1952年6月23日

梅月紹介の友人来宅、家族ともども食事、この会話で3歳半の長女のモモが英語で日常生活をつたえている。八島とこの友人と「民芸論」を交わしたようだ。また、八島が蒐集しているゴッホの複製200葉のこと、など書き、八島と梅月が編集者・寄稿家という関係以上に深まっていることがわかる。NYでそれほど多くの日本人と交渉のない八島は、梅月の紹介の友人を喜んで迎え、知的な会話を楽しんでいる。「民

芸」論はのちに八島の作品のバックボーンの一つになる。

1952年7月9日

梅月が送った恒例の珍味・海産物へのお礼状。家族的な付き合いが深まっている。1952年ころでは、昆布などの日本の海産物は入手できないわけでもなかったが、ニューヨークに比し、『ニューカナディアン』社が本拠を構えたカナダのトロントのほうが日本人コミュニティは人員も多く、充実していた。八島によると、いつとき、長年煩わせていた「胃潰瘍から開放されて、人生一新」したようである。

1952年8月1日

梅月から贈った「数子昆布」への礼状、モモの「扁桃腺」など家族間の話題だが、同時に一部の日本語新聞にあらわれた退廃的なコラムを批判している。「ナンセンスの遊戯もの」は俗うけの面白さがありますが、読者の下級な弱味につけこんだ、ものと手厳しい。「今後のカナディアンのために一言する」と。八島は児童向けの絵本や物語を執筆・出版しており、卑猥な文章が我慢ならなかったようだ。八島の「絵」に対する求道者的な率直さは日本脱出時とかわらない。梅月またきまじめ一辺倒のジャーナリストだった。

Ⅲ ロサンゼルスへ転居、西海岸生活の幕開け

八島のニューヨークでの生活は困難をきわめたが、出版社が多かったことが幸いして、絵本をライフワークとして取り組むことはできた。また、代表的な日刊新聞が書評等で取り上げることになり、八島の声価を内外に広げることも

できた。しかし、日本人コミュニティとの結びつきは規模が小さく限定的だった。わずかに『ニューカナディアン』『シカゴ新報』『ニューヨーク新報』という戦時末期に日本の民主化を進めようという「民主化委員会」の活動家が手がける日本語新聞が八島のエッセイを掲載したりして支援するにとどまった。時代は「サンフランシスコ条約」で日米は新しい関係に入ろうとしていた。

八島には、もっと大きい日系社会に根を広げること、それを通じて祖国日本に思いや仕事を広げること、絵本の出版、個展開催や絵の頒布だけでなく、後継者養成の学校を創設することなど、構想を実現するには西海岸が適していた。なによりも、年来の喘息などの長患いの温かい転地療法が必要だった。二人の子供の将来も西海岸に機会があるように思えた。かくてロスアンゼルスへの移住となる。

1952年11月10日

梅月は、北米への日本人の移民の文化的影響として、「民芸」に注目しているので、それに関連したエッセイは書けないか、という提案の文章を送ったことに対する八島の返信。八島は『村の樹』の仕上げに没頭していること。近日カリフォルニアへ半年の計画で「写生」にでかけること。その間に対応したいという返信。八島はハートフォード財団の支援で南カリフォルニアの画家村で1年ほど生活できることになる。

この米国西海岸での生活がやがて、一家をあげてのロサンゼルス移住になる。梅月の提案はやがて、八島の「民芸」にモチーフを定めた諸作品で実を結んでゆく。

1952年11月20日

依頼されている原稿のこと。エッセイを送ったが、短かすぎたり、「注文の主旨」と離れたらしいこと、等のお詫び。また、新年号のほうは、難しいこと、挿絵の雪舟の複製、北米新報にも使わせていただきたいことの諒解など。八島は東海岸の日本人・日系人のあいだで人気が高まってきていて、シカゴ新報からも同様の転載希望が寄せられていたようだ。

1952年11月27日

約束していた雪舟の複製、都合で送れなくなったので、かわりに八島の作品の一部をおくる。ここでもゲラ刷りの所望、エッセイにも推敲をくわえていた。

1952年12月6日

歳暮の礼状。加州ゆき翌年1月以降に延期のこと。第2の絵本、「2週間ほど憂鬱としていたが、2、3日で見取り図本が出来上がるところまで漕ぎつけた」こと、題名は「人形村」で、主人公は5歳の日系市民、22個の人形と6匹の家畜の民芸品を総動員、もとより民芸品礼賛以外ではないこと。ヴァイキング社の出版になるとおもう」。見取図本から、本式の下絵、4色か5色の各色セパレーション下絵をつくるという順序がこれまた命がけの仕事だと伝えている。またおりから猛威をふるっているマッカーシズムに乗ぜられぬよう新聞を通じての始動をねがいたいとも、知識人を狙い撃ちにした「赤狩り」で八島は題材を非社会的なものに限定していた節がある。生活は法的にも、経済的にも不安定であったことを考えると無理もない時期だ。

1952年12月19日

新年号のゲラを落手して、割り付けに感心し、誤植も皆無と報告。八島の側は、「春雪の道」

の版を所望、後年、画集を計画中とのこと。さきの第2の絵本「民芸人形村」も契約にこぎつけたこと、第3の絵本「水差壺物語」の絵取図本をつくることまでできた、「捲土重来」、年来の志の実現することができて、己を慰めるところがある、と。

1953年1月9日

稿料への感謝「好意に甘えすぎ」と書くほど、梅月は多額の支援を続行しているようだ。日本から到着した「北斎漫画」10数冊をめくりながら「遅しく内容豊富な生活力を持ち、東洋的な簡素なところまでわりきってみたい」と新年の決意を披露している。これが、八島の芸術の基軸であった。また、前年来の話題の「民芸」ものも実現したいが、「可能なだけの保証」が確保できるのか、との問い合わせしている。これが明確でないと仕事が進まないということ。八島のフリーランスなアーティストとしての一作一作、真剣に勝負している様子がわかる。

1953年3月20日

前便で「あまりセチ辛いことを書いたので、気にしていました」。八島も「胃潰瘍のドン底でシカゴ新報」の仕事を続けた祟り、としている。「加州ゆきの期限はとっくに過ぎているのですが、出発前に『息子読書像』1枚完成を計画していたのが、なかなか筆をおく気にならず、そういう中で旅費をひねりだすために走りまわる気にはならず」と。

八島のロサンゼルス移住のための経費の捻出も例によって、困窮をきわめていた。この書簡には、八島の移住先の住所であるパシフィック・パリセードのアドレスも付記されているので、具体化しているがすすまない。パシフィック・パリセードというのは、LA（ロサンゼルス）

ス) 市の海岸側の小都市で東にサンタ・モニカ、北にベル・エアという高級住宅地に、挟まれ昔からハリウッドの俳優、作家、芸術家の多い閑静なお屋敷町、ここにアトリエ付きの住宅を見つけた次第だ。NYの居宅とは雲泥の差だ。

日付不明

「青年になりかけている息子の肖像大作」も完成にちかづいているが、モデルが夏場のホテルのアルバイトで出掛けているので、秋まで中止。そこで、画室の窓からの舗道を大作にしようとしている最中という。八島は妻、長男、長女らを絵のモデルにしている。渡米前も近所の交通労働者をモデルに習作に励んでいて、ごくありふれた人々を描いてきた。

1953年8月21日

書簡の間隔がめずらしく5ヶ月間あいているのは、ロサンゼルスへ一家あげて移住したことがまずあると思う。画家としてすくなくない画材、作品、資料それに4人の家族のアメリカ大陸横断の大事業である。今日でも容易ではない。会社、政府の支援のないフリーな芸術家の移動である。

南加州の西海岸、風光明媚、温暖、太平洋の向こうに祖国日本を感じる新居におちついてすっかり上機嫌の様子が書簡にある。文字もころなしか太くしっかりした筆跡になっている。八島を小躍りさせたのは、環境だけではない。ニューヨーク時代のフェローシップがあらたに6カ月になり、在米の日本人・日系人20数人で八島を迎えての版画講習会が生まれ、講師のほうがかえってインスパイアをえているなど、新しい創作意欲を刺激していること、などだ。

1953年10月22日

冒頭は例によって、梅月の「数子昆布」への

お礼。二人が交流し始めてから梅月のおもいやりで、好物というためたびたび送っている。「羅府の日本町」で醤油を購入、ひとり珍重したこと、前月でフェローシップが切れたのでパシフィック・パリセードをはなれて羅府にきたが、再許可で再度もどったこと、絵本の出版も重なったことなど、近況を報告。

絵本(ヴァイキング社から *The Village Tree* 『村の樹』発行)は寄贈者名簿に梅月もいれたこと、『ニューカナディアン』で紹介してほしいこと、次年度の「児童文庫組合」で良書選定にはいったこと、亀岡書店(『日刊民衆』以来の同志・亀岡徳衛はトロントで日本語図書の書店を経営していた)で扱ってほしいことなど。同時に次作「道草いっぱい」という姉妹編に取り組んでいたこと。

ヴァイキング社のアドレスとともに4割引きで卸せること、今回は八島は扱ってないことを付記しており、それまでは、自費出版または著者負担のある出版だったようだ。

1953年12月19日

梅月が乞われてさがして送った『日本児童歌曲集』へのお礼、テーブルコードも同時に八島は入手し、内容に感動している。児童向けの絵本を制作してゆく上に、早い時期に日本を去った八島には材料の入手は不可能だったようで、新聞を長年編集・経営してきた梅月にいちいち依頼したようだ。八島がロサンゼルスに開設した「羅府漫画研究所」も講習受講者が25名も集まり、元気づけられたこと、梅月がいれば喜んだであろうに、とその成功の支援者に敬意を表している。

1953年11月5日

『ニューカナディアン』の八島の新著の新刊

紹介、「どの新聞よりも早く」されたことに謝意。ところで、同紙からの新たな原稿依頼は不可能という返事。絵の作品も同様。LAでの念願の「研究所」や自身の仕事が軌道に乗り始めた様子だ。

1953年12月10日

前掲の漫画研究所の講習受講者の第1回展が開催されたこと、このため、『ニューカナディアン』から依頼のカットの作品が遅れたこと、この作品は胃潰瘍快癒の自己祝いであること。またこの件でのお詫びと「新しい要望」として、新聞記事で知った「日本民謡テープレコード」30巻を入手したいこと、さらに、その歌手がだれか、芸者衆ではだめ、地方地方の唄い手なら本物、それも知りたい、と。梅月はころよく、その要望に新聞編集の多忙のなか、応えた。

1954年1月11日

さきに依頼した民謡テープを梅月が快諾したことへの謝意。ファンドからのフェローシップによる「溪谷画房」での1953年度の1年ちかい「習作三昧」が終了し、新しい「仕事」の決意。

1954年2月16日

近日、「南加のまぶしい光りの中から」転居のこと、『村の樹』は羅府でもよい売れ行き、LAタイムズが日曜版でとりあげる由。雑誌『シーン』12月号に制作に因んで、八島の家族の写真が掲載されていること、などを報告。これらの八島の創作活動には必ずといってよいほど、梅月は意見、感想をつたえ、八島の構想に肉付けた。

1954年6月2日

書簡によると、八島は梅月に前便で面倒な支

援を頼みこんだようだ。この前便は見当たらない。八島はその依頼を取り下げる文面である。理由は第2の絵本が決定、製版が急がれてきたこと、第3の絵本も契約に至ったことで、財政事情が好転したとある。八島の仕事が米国のジャーナリズムでも注目されはじめた47歳である。翌1955年には、羅府に「八島美術研究所」を創設するまでになる。八島は好調のときも、スランプのときも梅月に長い文章をおくっている。

IV 故郷蘇る絵本『からすたろう』

(Crow Boy) の成功

1954年10月23日

第2の絵本『道草いっぱい』の紹介が『ニューカナディアン』に掲載されたことに対するお礼。ニューヨーク市立図書館で、本年度の「児童絵本の最も貢献的画家」にえらばれ、八島に講演させることが決定。講演では「Crow Boy」(からすたろう)という題、「遅鈍愚鈍」といわれた農家の級友たちのもつ独特の素質を、ひとりの少年に結実させる物語、これは八島の「悪いことをせずに生活する糧」をうる「民芸」につながり、としている。八島の画風になった墨と筆、木炭等による筆致に加え、「正直勤勉」という日本の伝統的な倫理観と「人間性」という西洋の思想を結びつけた作品で、海外の日本人・日系人だけでなく、読者を勇気づけたものだった。

『Crow Boy』ヴァイキング社から1955年に出版され、米国の絵本にかんする著名な賞であるカルディコット賞次席など多数の賞を受賞した。八島のもっとも脂ののりきった時期である。

思想的なパートナーになっていた梅月ともども喜びあっている。

1954 年 12 月 6 日

『道草いっぱい』(Plenty to Watch) がニューヨーク市立図書館で推薦図書に選ばれたことを、日本の朝日新聞が、八島夫婦の写真つきで報道した。八島もたいそう嬉しかったとみえて、この新聞の現物クリッピングを同封した手紙を梅月にかいている。同時に八島夫婦の多忙になってきた身辺雑事にふれている。

1955 年 1 月 6 日

近況で、加州サンタバーバラのロダン展を鑑賞にゆき、風邪をひいたこと。妻と娘はニューヨーク、息子は日本で、やもめ暮らしのこと。八島 47 歳、梅月はひとまわり年長の 58 歳。梅月も病気がちで、健康には相当気をつけていた。『ニューカナディアン』も「健康談議」などというコラムで諸病万端の記事を書いて、高齢化した日本人・日系人読者の好評をえていた。八島は梅月に頻繁に手紙をかいたが、その都度、梅月から健康法の知識や医薬品がとどけられている。梅月は新聞記者の仕事として日本から和漢薬、医薬同根、薬膳料理などの情報を蒐集していた。

八島は例年の新年号の寄稿をさぼったお詫びと、反対に「児童と私」というテーマでの講演の英文と日本語のチェックを依頼するという虫のよいことを書いている。額縁工場の建設を急がねばならないことも多忙の理由のようである。

1955 年 1 月 7 日

風邪のこと、講演内容を日本語にしたいこと、原文の英語文はボストン発行の「Horn」誌の春季号に掲載されること。

1955 年 1 月 14 日

風邪のため送付の原稿についての弁明。英語での八島の発表ものについて、日本文にもどしてから活用してほしい、と。

1955 年 1 月 26 日

この前述の英文発表の原稿に、「ニューヨーク図書館での 1954 年度書籍祭」というサブタイトルを付すことの要望。八島は原稿を編集部に送るだけでなく、しばしば、カットを添付し、割り付け案(冒頭の図版)を示し、見出し、タイトル、八島の肩書・経歴紹介の案文を送付した。八島が常連執筆をした『ニューカナディアン』『シカゴ新報』『北米新報』『羅府新報』の編集者にプロの経験ある整理記者がいなかったこと、寄稿原稿のすみずみまで気を使ったこと、読者への高い効果を考えたことなど、だ。

1955 年 2 月 10 日

梅月からの葉茶と、日英両文の切り抜きの送付へのお礼。梅月に翻訳を依頼したのは、春にアメリカの季刊雑誌が印刷されるため、ということ。八島にとって初めてのまとまった英語の発表物らしく、九州の大学英文科出の兄と、米軍兵士として日本に進駐中の息子のマコにも送りたいと、送付方を依頼している。仕事としては、額縁工場(家具も製作)が近々完成すること、第3の絵本『からすたろう』の製版にかかっていること。マコは日本では父親にとって問題の多い若者のようである。

なお、7月8日に八島光子から梅月に、娘とふたり、ニューヨークに滞在していたが、羅府の八島のところに合流することになった挨拶文がきている。長いあいだ家族ごとの交際で、梅月は双方に『ニューカナディアン』紙をおくっていた。

1955 年 9 月 17 日

羅府で天理教の支援で、新聞人や八島が講師になって、「日本文化講座」を開催するプランがすすんでおり、その講座で、露木海蔵の映画を上映したいので、協力がえられないか。露木は梅月の30年にわたる友人で、また鈴木悦・田村俊子らと協力して1920年にヴァンクーヴァー市で創立された日本人木材労組の幹部の一人でもあった。映画技師の資格をもち、またカナダで映画製作にも加わっていた。

この書簡で妻と娘がニューヨークから無事到着し、家族的な雰囲気にはさしづりになったことも伝えた。

なお、残存している梅月から八島への返信では、露木の一連の映画フィルムは、トロントになく、モントリオールの日系人の映画業者のところであって、八島の要望に沿えないことが伝えられた。

1956年1月18日

息子のマコが除隊し、「親子再結合の年」だった。多忙だが『からすたろう』も出版したこと。

1956年2月20日

ユダヤ系アメリカ人のイーストサイド・コミュニティ・センターの後援で個展を開くことになったこと。その他、2、3か所から同様の申込、過去15年間の作品整理、額縁や会場装飾で渾身の活動中。『からすたろう』も梅月に贈呈予定が売り切れ、『ニューカナディアン』での紹介や広告が好影響していること、『ニューカナディアン』での取り扱い頒布代行で、著者の署名という記事は売れ行きに拍車になったこと、絵本のマーケティングにもアドバイスしている。八島の手紙にはコミュニティ・センターでの羅府での八島第1回個展の案内状も同封さ

れている。八島の仕事が最も軌道に乗った時期だが、梅月への報告も忘れなかった。

1956年4月4日

文面はカナダの女性から『からすたろう』の注文が相当数あったこと、引き続きよく売れていること、今回は「カルディコット賞」の次点等を得たこと、など。

1956年5月7日

つぎの絵本「あそびほうだい」(*Plenty to Play*)のダミーが2カ月余に完成、その日、読者の声を受け取り、感激。この絵本の構想をかなり熱っぽく書いている。『からすたろう』のような物語の筋はなく、豊かな幼児の体験を背景にしていること、「志は大にして壮なるを以て由とする」と遠大な仕事の構想に大きなページをさいた書簡である。画家として自立できるのではないかと、という確信がめばえてきた様子である。額縁工場も整理整頓して久しぶりに写生も行いたいとしている。

1956年7月3日

梅月からの絵本の注文で、版元との仲立ちでの決済の問題。また『からすたろう』の売れ行きがよく、第4の絵本の企画が進んでいること。

1956年7月16日

この夏は、妻・光はかつて八島が学んだ渓谷に絵の仕事で出向いていること。48歳になり、北斎の「百歳を超えなんか、もはや余の暇よりは一点一格といえども生命なきは生まれいでざるべし」の心境で週3日は画作、文筆を敢えて断つ、と心情をつたえている。文筆を辞退しているわりに、信頼をおく梅月へ長文の書簡。次の画作や絵本のための自問自答を吐露しているかのようなのである。

1956年9月28日

10月にパサディナ市立図書館で個展、11月には新装の天理教画廊で、八島の絵画研究所の第2回展開催予定、のお知らせ。同時に「受け身をもっと機動的に」という心情も。暫く書いていない、と釈明。

12月18日付けで、エッセイ「雨傘」をおくってくる。この原稿にたぶん、添え状がある筈だが、残存していない。9月28日の書簡だけでなく、新年号への執筆を遅延したり、欠筆したりしていることに、陳謝する文章が目につくことが多く、八島がつねに心がけていたようである。「雨傘」は、じつは八島の第4の絵本のモチーフで、それが、つぎの#54番目の梅月あての書簡で心情を展開している。

1957年6月8日

この書簡の直前、梅月は八島宛に懇切丁寧な便りと、『ニューカナディアン』社の編集室の風景写真をおくっている。八島は「忙中閑あり」の心境と喜び、日本から画家や親族が来訪するなか、自身の人生や余生に思いをはせて、創作におよぶ考えを忌憚なく梅月にもちかけている。こんなことを率直に書けるのも八島の梅月との深い友情や信頼感のたまものであった。

この書簡、つくったばかりらしい八島の氏名いりの用箋に1,400字の長文で、五反田の警察署に長期に留置されたことから始まり、「煉獄の戦い」をふりかえる。そのうえで、第4の絵本『雨傘』の画像の推敲と。妻や除隊後のマコとの問題まで、書き及ぶ、書簡だが、エッセイのように何度も消したり、加筆したりで、思索の深さがでている。

1957年9月3日

八島も羅府にきて、塾を開いたり、個展を計画したりで、日系コミュニティに根をおろした

こと、八島の発案で「二世美術展」に「児童展」を新設すること。また「からすたろう」を凌駕したいと計画した「雨傘」の版下仕事が完了したこと、など伝えている。7, 8年「印税のはいるほどの絵本をつくってきた」奮闘を吐露、互いに初老に達したことをいたわっている。梅月56歳、八島46歳。梅月も活動をスローダウンする年齢である。

1957年11月9日

梅月から再び新年号の原稿依頼の連絡に対して「今回は締め切りに間に合わせるよう努力する」という内容。また年末にかけて、講演依頼がおおく、南加を走り回っている、と。八島のこれまでにない活動の広がりを二人は喜びあった。

1957年12月17日

エッセイの「郷愁」の原稿につけた添え状。やっと、2,000字の原稿は仕上げたが、画稿のほうは「かんべん」としている。

1958年2月28日

第4の絵本『雨傘』の発行と同時に、「児童文庫ギルド」の良書選定本になったこと、日本でも店頭にならべられること、といった日本の新聞記事のクリッピングが添えられた手紙。この記事、コピーではないので、日本から送られてきた原紙そのもの。八島の梅月への通知に熱のいれようがわかる。『ニューカナディアン』社やトロントの同ジクイーン街で日本語書籍を扱う「亀岡徳衛書籍貿易商会」の努力で八島の本は相当数うれていたのである。

1958年10月29日

いつもの梅月からの贈り物である「数子昆布」へのお礼と、また新年号のエッセイ確認。八島は絵本やその賞、新聞での書評で仕事が増

えたこと、つぎの絵本のアイデア、ロングビーチ図書館での壁画、つぎの年次展での大作の着手と、新しい構想を報告している。

1960年12月19日

八島の妻・光子（ここでは光子と署名）が「あわてた日本ゆき」という原稿を『ニューカナディアン』に寄せている。21年ぶりの両親との再会のためであった。八島は光子と共著で『モモの仔猫』（*Momo's Kitten*）をヴァイキング・プレスから出版している。

1961年10月28日

近況の挨拶。50歳をこえての自省など。

V 23年ぶりの祖国日本への帰国と日本での仕事の波及

八島の「第4の絵本」である『あまがさ』の日本語版が福音館書店で出版されたのを機に23年ぶりの帰国をはたす。同時に郷里の鹿児島で「八島太郎玉手箱展」が開催されるなど、日本での仕事が増え、アメリカでの生活に転機をむかえる。『ニューカナディアン』の梅月も九州の出身でもあって、この展示プロセスに支援をあたえた。

1964年7月10日

八島の書簡が激減する。八島が仕事が増えてきたこと、絵本もたてつづけに出版されたこと、に反して梅月が病気がちになったためとみられる。1962年、八島は54歳、数十年ぶりに日本へ帰国するが、梅月は64歳、健康の理由もあり、またカナダ日系人のあいだでの役割に一応の区切りがついたと判断しはじめたようで、二人の往復書簡はめっきり激減する。

1964年9月2日

この秋、娘のマコが結婚。八島も56歳。郷里の鹿児島大学の教員が研究でカナダへ、面識がないが友人から知己の紹介を依頼されたことを、梅月がサポートしてくれるように依頼。

1964年9月19日

前便の鹿児島大の研究者の件で追加情報。『ニューカナディアン』の同人のひとり露木海造が八島を訪ねた際に、八島が日本滞在中に生まれた変化を画の冊子にし、梅月へ託したことが、1953年ころ八島の小作品を購入されたひとが、不満だったとのことで、改めて作品を送りたいと。ニューヨークから羅府へ移転間際のときの「作品頒布」活動時に生じた齟齬のようである。八島の画家としての良心的なフォローである。

1964年10月5日

前便の八島の「画会」賛助員の作品についての齟齬のフォロー。この3通は郵便局のエアロメールの用紙を使用しているが、いずれもびっしり書き込んでおり、八島の齟齬の解決への姿勢を見る思いである。

1965年12月28日

定例の新年号の原稿が遅延したことへのお詫びと、文中の「池、庭、灌木」に関する訂正と加筆事項。庭の撮影者の礼儀からグレン・ジョンソンの名前を加筆することなどの連絡。

1966年1月7日

この原稿利用できなかったようで、新聞をみて八島からのお詫び。『ニューカナディアン』としては、次のクリスマス特集号で、という提案だが、八島は、そのとき、どんな心情か、と自問している。映画界入りした息子のマコは目下、台湾でロケ中、家族の動向をもしらせている。マコはLAのエスニック・グループで立ち

上げた小劇場「東西劇団」から、映画に進出していた。マコは「砲艦サンパブロ」でアカデミー賞助演男優賞にノミネートされた。

1968年1月18日

八島 60 歳。頭痛で伏すこと多いようで、70 歳の梅月からも見舞い状。その返礼である。出会いからこの時まで 20 年余、その作り上げた「サイバー・アトリエ」としての「公共空間」を全力で走りぬけてきた二人。

1968年9月6日

過去の書き物を整理して「切り抜き帖」を準備中と。八島も自身を見直す年齢にそのアイデアを梅月に打ち明ける。梅月も「日系カナダ入移民史」の完成にむけた身辺整理をはじめていた。八島は『ニューカナディアン』の掲載号の 1968 年 7 月 24 日号を加えたいので、一部送付乞うと依頼。

1969年1月16日

印刷物の「人間医学」を頂戴、八島の健康への懸念、原稿への寸志も。年末年始、全国的な書籍週間でサインセールや講演で東奔西走、またまた新年号の原稿に、エラー。そこへ鹿児島県文化センターの仕事も舞い込む。「著者のボーナス」です。

1969年6月9日

新年号に八島から新提案。1967 年にヴァイキング社から出版の『海浜物語』(Seashore Story) を梅月に贈呈した。八島のほうは鹿児島県文化センターの大壁画 (60×12) を 2 カ月がかりで完成、空輸したことを、梅月にさっそく報告した。この絵本は 1983 年、白泉社から日本語版になった。

1970年4月13日

梅月、前年に妻・千代死去の報が八島に、日

本から帰国して、この報に接す。梅月も健康に問題生じ、『ニューカナディアン』でも盛んに「健康談議」が書かれる。とくに漢方医法にくわしく、「食餌療法」を学んでいた八島は、千代死去のニュースを新聞で知ったようだ。日本に滞在中、親族の不幸を知ることになっての悲しみの共有を述べている。

1977年12月20日

『ニューカナディアン』の新年号向けに「仰臥漫録」のエッセイを送付したさいの添え状。69 歳になった八島は 1977 年 7 月、脳溢血に倒れた。住居を日系人の多い羅府南部の郊外住宅地ガーディナ市に移動していた。このエッセイのタイトルは 1978 年 7 月から『TV ファン』誌に連載する「仰臥漫録」の下構想だった。添え状にも「ご好意に報いるために全力をつくした」とのべ、病状をわかってほしいとしている。添え状も原稿もかつての力強さにかけているが、文章の添削推敲のあとがみられる。エッセイも「死とはなんだろう」となんとも言い及んでいる。

1978年6月18日

お見舞いに対する礼状。梅月は友人の未亡人（こちら同名の千代）と再婚しており、夫婦で八島を励まし、支援していることに、感謝したもの。八島は入院中で、執筆するのにも不自由であった。用紙は八島がデザインした「ヤカラング」という樹木のデッサンが印刷されていた。「ヤカラングの会」はかれの指導する羅府の句会である。晩年は俳句にも精をだした。

月日の不明な手紙

羅府へ移ってまもなくと思われるが、近況を梅月に知らせる文のさいごに、「彷徨さいはつる庭に花と實のレモン樹」と一句むすんでい

る。ニューヨークのマンハッタンのビルの一室の住居と違い羅府では庭に柑橘類もあった。月日の不明な手紙

時期は第1の絵本（『村の樹』1998年、創風社から日本語版として出版）のあと、第2の絵本の製版終了としており、羅府移転を前にしてとしているので、1953年4月と推定される。八島は「一時的に売れることより、末永い生命」の本をめざしている、としている。一方、移転のために第2、第3の絵本の契約をして費用を前借したり、宣伝も新しくする、などの苦労も伝えている。

八島の梅月への便りは経済的苦衷を率直にのべて、小品の絵の頒布を依頼したり、絵本の普及をもとめたり、病状を伝えたりと、友人としての腹をわたったものが多い。同時に絵本の長期の構想、次作品のダミーの相談と創作のうえでの不可欠な協力者となっている。また、本書簡のなかでも、繰り広げられている戦前の日本軍部への激しい批判精神はいささかも衰えていない。

数多い、八島の書簡のなかでも、この内容はまことに格調高いものがあり、「胃潰瘍を天啓として画家としての自己にたちもどる」決意を羅府移転前にのべている。八島にとって、ニューヨークから、羅府への移転は、画家としての良心の転地療法だったに違いない。

月日の不明な手紙

1953年3月ころか、ハートフォード財団の支援で太平洋の海岸の町で写生三昧の生活が終了するころ。第2の絵本の製版もすんで、「渡米以来」の「塵芥の堆積」を一掃する「南加移住」実記について考えたい、と打診している。羅府移住が成功だったことだ。

VI 書簡群が蒔種した「絵本」発芽の公共空間

八島太郎の梅月高市あての書簡のパッケージは、現在のところここまでである。実に31年間の80通もの思想形成のためのコミュニケーションである。梅月から同程度の通信を送っているわけだから、長いあいだのしっかりした二人の役割あつての「八島絵本」であった。本題と関係ないと思われる私信やグリーティング・カードの類、書籍頒布上の事務連絡類のものは省略しても、日付けのはっきりしている書簡類は1978年までに絶えることはなかった。八島70歳、梅月は80歳、梅月はその2年後に82歳で他界している。梅月は一応の勝利に終わった「レドレス」（戦時下、日本人・日系人へのカナダ政府の抑圧等への政府の公式の謝罪と補償）の運動の組織が生まれたのは、1981年初頭であった。それを果たせた新聞『ニューカナディアン』の経営に全力でエネルギーを注ぎ込み、その成果をみることなく新聞経営を後進にゆずっていた。晩節は新聞をはなれてもカナダに暮らす高齢の、また単身を余儀なくされた日本人のための支援のシステムや施設、信仰、やすらぎの環境づくりにささげた。八島同様、かつては熱心な社会運動家であるとともに、加齢とともに人間の道をもとめた求道者であることも共通している。晩年、信条・信仰に導かれたとしても市民運動とよぶにはあまりにも人間的な営為であった。